

『小五教育技術』一九五九年三月（小学館）

## 教育技術の向上のために

— 実践の記録をとる意味 —

国立教育研究所 矢口 新

一  
実践記録とは何か、なんのためにとるのであるか。本題にはいる前に、すこし一般的に考えてみよう。

自然科学でも社会科学でも、事実を精細に記述するということは第一歩である。科学の一つの分類として記述科学、説明科学などという分類があることはよく知られているが、記述することはそもそもはじまりである。事実が明確に把握されなくては、何事もはじまらないのである。これは、研究の第一歩であるといえる。

教育において実践記録をとるというのも、教育を研究するためであることは言うをまたない。実践の記録をとるというのも、つまり事実をおさえるために行うのであって、教育の科学の第一歩であるということが出来る。はじめに自然科学社会科学などと大げさなことを言うたけれども、根本のことを、まずはつきりさせておかなくてはならないと思うから述べたのである。

ところで自然現象と社会現象とは、その性質が異なっているといわれる。よく自然はくりかえすといわれる通り、例えば太陽は朝東から出て夕方西へ沈むということを毎日繰返している。社会現象は、歴史の一回性などといわれるが、きわめて個性的現象で一回しか起らない。ある人がある所である時行ったことはただ、それ一回である。人々が

毎日くりかえしているようなことでも、社会現象としては一回限りのものである。自然の生理現象はくりかえされるが、それは、自然現象である。

自然科学は毎日くりかえされる現象をとらえて、それを解釈し、そこから自然の法則を導き出す仕事をする。社会現象はそう簡単に法則を導き出すことはできない。しかしその現象を解釈し、そのよって来たる所を理解することはできる。もう一度同じことは起らないけれども、似たようなことは起るかも知れない。次に起ったことを、似たような現象としてつかむことができるのである。

かつてベーコンが、自然を克服しようと思えば「自然に従え」といった。自然のありのままの記述から自然を法則としてつかみ、次ではそれに対抗する行動を起すことができる。

近代以後、特に最近のめざましい世界の発展はそうした自然科学によっている。社会科学についてもまたこの事は当てはまるというべきであろう。もとより歴史の一回性を認めての上のことである。

われわれは、よく子どもとはこれこれこういうものであるなどと語る。きわめて一般的な表現をする。いわば法則的となえている。このことは、多くの事実にもとづいて解釈されたことである。自然科学の法則のように厳密ではないが或る程度の一般性をもっている。そういうことの上に、われわれの教育的活動も行われている。

教育という活動、特に学習の現場は最も人間くさくて、文字通り一回性のものである。しかしそういう活動力、事実をとらえ、それを解釈して子どもが物事を把握してゆくプロセスをつかむことによつて、よりすぐれた実践が生み出されるのである。

## 二

実践の記録をとることの一般的な意味は以上でつきるのであるが、具体的には様々な問題がある。一般に実践の記録というと、ある人が

実践したことの回想録のようなものが多い。つまり自分の行ったことを自分であとからまとめてみるのである。今私の手もとに広島県の西条小学校の今田先生の記録であるが、一般にはこういう実践報告が実践記録といわれているようである。これももとより実践記録といつてよいが、これは例えば有名な政治家が隠退して書いた回想録に似ている。

われわれはその政治家が活躍していた頃起った事件の推移をよく知っていて、それに対してその政治家がいろいろ考えてどんな行動をしたかそこはどんな動機や理由があったか、そこにはどんな動機や理由があったか、少なくともその政治家はどう考えていたかを知ることができる。そうして或る経過をたどった事件の根底にあるものを探ることができる。そこからまた、ある意味の教訓を得る。例えば歴史の動きに、人々の物の考え方がどう影響したか、如何なる思想によつて、如何なる事件が起つて来たか等々である。学習の場の実践報告はちようどそういう役目をもっている。

ただここにある実践報告は、回想でいえば事件の経過、つまり学習の実際がどう行われたかということは、よくわからない。それはどこまでも今田先生の頭を通じて表現されている。例えば導入の段階の所で、子どもはこれこれこう発表したと述べられているが、それは今田先生によつて解釈された子どもの発表であつて、子供がどう述べたかは、今田先生の頭を通じた以外のことはつかめない。或いは別の解釈が成立つような発表であつたかも知れない。或いはまた、展開の段階で子供が様々な意見を述べているが、これもそうである。例えば、筆者はその意見が、どのくらい強さで、或はどのような態度で、或はクラスの人員の中でどういうまとまり方をして行つたのか、そういうことはこの授業の場合には極めて大切なことだと思う。単なる言葉としてしか子どもが言っていないのなら、学習効果はあまりないと考えられるし、子供ひとり一人の中で、或は多くの子供の中で精神的な葛藤

が行われていたのなら効果があつたと思われるが、その辺もつかみようがない。つまり学習という現実の移りゆきの姿が、大きく不足しているのである。もし、そういうものが私なりにわかっている、その上でこの実践報告をみせていただいたら、非常に勉強になったと思うのである。

その点になるともう一つの「四班のけんか」の記録の方はより具体的にできている。これをみると、男の子と女の子とのけんかを学級会がとりあげて、集団で討議した模様はよくわかる。もつとも学級の全体がどんな雰囲気かというような点はわからない所があるけれども、もつと観察をこういう態度で精細にしてゆけばいくらかでも具体的にすることができよう。つまりこれは歴史的事件の教育でいえば学習の経過のありのままの記録なのであろう。

若しこれが渡辺先生の頭を通して、子供の発言の類型はこれこれ、そして結論はこうというように書かれていたら、わからない所が出て来るであろう。だからこのような児童会の生徒の記録をみると、いろいろなことが考えられる。例えばこれはけんかの問題をとりあげて児童会を開いたけれども、その事に関して子供に考えさせることをすることができなかった結果に終わっているのではないか。結局けんかはいけないということの繰り返しに終わっていて、子供たちがもう一つ深く自分の気持、相手の気持を理解して、子供に人間の心情についての反省や調査をさせるように学習が行われなかった。そういうことをしないと、けんかしてはいけないということを習慣的にいうだけで、子供の心の発展にならないのではないか。こんなことが考えられるが、それはこの記録が事実をありのままにとっているからである。子供の発言も子供の論理で述べられている。教師の頭で解釈されたものではない所に、価値があるのであろう。

## 三

このように考えると、実践の記録はできるだけ客観的なものが望ましいことになる。第一義的な条件であるということができよう。そしてそういうものをもって何をするかといえば、学習のさせ方の知恵をうるのだということになる。なる程その記録をとった学習はそれで過ぎ去ってしまった、もう取りかえしがつかないが、それでも、子供が何を考えているかははっきりわかったであろう。渡辺先生の児童会をよんでみていただきたい。そこには、子供の耕されていない人間観があらわに表現され、それがそのままとなっていることがよくわかる。その子供に、明日からやはり学習の現場で接触するのである。渡辺先生としてはそれをどうするかは、はっきり考えておかなくてはならぬことである。これが若しこういう記録の残されなままに過ぎてしまったら、やはり子供をみる一つのチャンスを失ったことになるのである。だから記録が客観的にとられたら、それは、その実践を行った教師にとつては、非常によい研究のデータがとれたことになるのである。しかしこういう記録は唯その授業を行った先生のためばかりでなく、われわれのようなものにも役に立つ。つまりそれに全然関係していない他の教師、或は教育を研究することを仕事としている者にとつてもすぐれたデータである。多くの教師はこの記録を分析して、これらのどこにもある子どもの姿をみるであろう。このことと同じ事態はもう二度と起らないことであるが、同様なことは起る可能性があり、現に毎月起っているとみてよい。

それをどう処理するかについて、やはり一つの大きな教訓を得たことになるのである。

こういうことを積み重ねて、多くの事実につづかり、多くの経験をへて、それを次第に整理してゆくことにより、われわれの活動が、次

第にツボにはまって来るのである。それが人間が知恵をもったということであろう。そういう点では、直接経験したことも、人の経験にふれることにより、われわれの経験を何倍かにすることが出来るわけである。つまり、それだけ人生が豊かになって来る。裏からいえば、実践の記録は、記録によつて、個々の人々の人生を豊かにする役割を果すものとも言えるのである。

科学に、個体発生は系統発生を物語るといふことがある。一人の教師は何世紀に亘る教育の歴史の上に立っているが、もし科学がなければ、進んだ現代において進んだ技術を使つて教師として働くことができないうであろう。

その科学とは、つまりここにいふ実践の記録の分析、解釈の積み上つたものなのである。教師自らが、そういう記録を土台にして、科学してゆくところに、教育の科学も進み、従つて教師の実践も進むのである。

従来教師は、自分の経験を掘り起し、掘り起して、教育の技術を次第につくりあげて来た。真剣な教師のその努力には頭のさがるものがあるが、それがもし多くの人々の協力によって行われるならば、その能率はうんと高くなるであろう。それはつまりもっと科学的、客観的になることである。教師の実践をできるだけ客観的にとらえ、科学的に分析、解釈することを身につけたら、これまで一人であれこれと苦心したことも遙かに能率的に処理できるようになるであろう。

実践の記録とは、そのような意味をもつたものである。これを私は**観察記録**とよんでいる。つまり自分の報告書でなく、他の人によつて、観察して記録をとつてもらふのが最もよいと思うからである。簡単にいえば速記録のようなものである。自分であとから報告するとなるとやはり自分の考えから一步も出られない恐れがあるので、私は客観的に、他人に速記録をとつてもらふことをすすめる。

四

観察記録はつまり速記録だと考えてよいが、私が速記録という意味は、なるべくだれの頭も通さない生(ナマ)の事実をつかまえるという意味である。そしてそれを多くの人が様々な角度から分析解釈する所に本当の事実がわかって来る。私の言う速記録は、解釈の入らない記録のことである。もとよりそれは基本的態度のことをいうのであって、事実において解釈が入らない記録ということはむしろかしいことである。テープレコーダーのようなもので機械的にとることも考えられるが、それはまたあとで聞いてみると、案外によくわからない所がある。むしろ実際に授業をみる人が、周囲の状況の描写も入れながら観察の記録をとった方がよい。その時にとる態度が速記録をとるようという意味で、私は速記録というのである。そういう態度で、教師は何を言い、どう指導したか、板書はどんなことをしたか、生徒はどう答えたか、五十人の学級の子供のどれ位がどう活動したか、ある子供が活動している時、他の子供は何をしているか、それらがどのような時間配列で行われていったか等々を観察と速記を合わせてとっていくのである。その形式は左の図のようにしたらよいのではないかと思う。私は、ザラ紙に図のようなわくをつくって、書いて行くようにしている。

こういう記録を学校で或は学年で教師が交代してとり合うことが、またよい勉強になるのである。よく研究会などで授業をみることは多いが、とかくあとの研究が印象批評にながちである。

時間	主 題	
	授業者	記録者
	教師の活動	児童の活動

もし多くの人がこういう観察記録をとる練習をしていると実践の見方がより客観的に科学的になるのである。そうすると一つの授業をみてもあとの研究の仕方がかわって来ることが予想される。

そしてその記録を学校の教師が皆で分析し合い、解釈し、問題を発見し合うことを続けて行くと、教育の技術についてはじめて自信のある見通しをもつようになるであろう。従来教師が与えられている教育実践についての科学的な方法というも多くの、観念的なものが多く、学者の研究した結論的なものだけを概念として与えられることが多い。真に教師が自分の力で教育の技術を身につけるといいうことになる、自分だけの狭い個人的経験のみにたよることが多い。そういう点をもっと近代化し、科学的にし、広く多くの教育実践をお互に見せ合つて、能率をよくする必要があるのではないか。いわば技術の公開である。しかも科学的な公開である。

考えてみると、教育の科学的研究の進歩にもかかわらず、技術の発展がこれに伴わないうらみがある。それは、技術の研究ということが、個人的秘密主義のもとにかくされているからである。意識してかくしているわけではないにしても、結果に於ては、昔ながらの学級王国の中で担任教師の手の中にかくされていることになってしまっている。

この点についてもっと教師たちの共同、協力ということを実現する必要があるのではないか。そして、それは多くの教師が、あくまで己れの実践を客観的にながめるといふ科学的意欲を堅持することによつてなされる。ある学校では、みんなで学習の計画をつくり、それを交代で実践してみ、その観察記録をとり、これを分析し研究して、カリキュラムや学習指導の改善をはかつて、長年の間積み上げて来ている。そういうことが、教育の技術を高次のものにしてゆく原動力となるのである。